# グリーンランドの中世ノルマン人（「ヴァイキング」）の遺跡を訪ねて

2001年７月30日～８月３日

伏　島　正　義

まずここで言う「中世ノルマン人」とはごく一般的に周知されている用語で言えば「ヴァイキング」である。ここで敢えて「ノルマン人」と表現したのは次のような理由である。「ヴァイキング」が歴史的に示す様相はさまざまであり、たとえば、次の説明を見ることができる。「ヴァイキングViking　8世紀から11世紀にかけてヨーロッパ各地を荒らし回ったスカンディナヴィア出身の海賊たちのこと。」（『世界史小辞典』山川出版社、2007年。p.75。）たしかに、たとえば西暦793年リンデスファーン修道院の襲撃を記す「アングロ＝サクソン年代記」によればこのような歴史的側面を看取することができる。しかし他方西暦1000年を機軸とするその前後に、冷涼にして強風が吹き荒れるなど、常に自然の脅威に晒される北大西洋に勇躍乗り出し、彼ら自身が建造した木造船を操って東西に入植地を建設するという活動を展開し、輝かしい歴史的功績を果たしたのも彼らであった。このような観点に注目し、「ヴァイキング」という語から受ける印象とは区別するために「ノルマン人」と表現する。

これまで筆者はイギリス、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランドなど、その本土に残されている、いわゆるノルマン人の遺跡を訪ね、調査してきた。その他にもビェルケ島、ゴトランド島、シェトランド諸島、フェロー諸島、ニューファンドランド島などにもその足跡を訪ねてきた。これらの踏査を後日まとめようかと思っていた。しかしこのところ、諸般の都合に

より、正確には身体的な問題のためこの計画の実現にも不安が去来してきた。そこでこのたびせめてその一部とはいえ、グリーンランドの遺跡について、その概略を綴っておくことがよいのではないかと判断した。

**2001年7月30日（月）**

04：00頃オスロのホテルでチェックアウトをし、列車の駅に行く。１番列車で空港駅に向かうこととする。券売機で切符を買う。値段が半分なのでおかしいと思いながらも、ホームへ行く。列車が到着したので、乗務員に尋ねた。正しい切符ではない、といい、程なくして、空港駅で精算するように紙切れを渡してくれた。空港駅に到着して、係員にその紙切れを見せ、精算しようとすると、そのまま出てもいい、という。60クローネ払わずに済んだことになる。大目に見てくれたのである。オスロ空港ではSk453 Oslo発07：05は、København（コペンハーゲン）に向けてほぼ定刻に離陸した。Københavnでは改めて入国の手続きはせず、そのままトランジットの搭乗口へ行く。GL785　10：00発Narssarssuaq（ナルサルスアーク）行きに乗る。さすがに天候の状況が厳しいグリーンランドへ行く飛行機のためか、ごっつい、頑強な感じの飛行機であった。グリーンランドに近づくと、幸運なことに、眼下一面に広がっていた雲に切れ目が現れ、濃紺の海には氷山が浮かび、陸地に入りこんだフィヨルドにはぎっしりと大小の氷山で埋まっているのもあれば、氷山が散らばっているもの、流氷に覆われたものなど、さまざまであった。雪をいただいた山々、それに突き出る尖った山の頂上。氷河が岩山の谷間を流れ下り、様々な模様を示していた。氷河が生きて、流れる川である事をはっきりと示している。数年前にアイスランドからKulusuk（クルスク）へ行ったときの

（グリーンランドの上空）

ことを想い出す。その時、飛行機がKulusuk空港に近づいた頃、眼下は濃霧に覆われていた。程なくして、飛行機の窓から見ると海面に浮かぶ氷山が、すぐ窓の外、斜め横に雲間から次々と、飛び込むように目撃されたことから推察すると、飛行機はかなり海面近く降下し、着陸態勢に入り、滑走路への着陸を試みていたと思われた。しかしながら飛行機は着陸を断念し、急上昇した。上向きの体と、お腹にかかる圧力が事の次第を充分感じ取っていた。そして天候が回復し、飛行場を覆っていた濃霧が晴れるまで、飛行機はしばらくあたり上空を遊弋したのであった。その時眼下に見た景観を思い出したが、その雄大な景色は、何度見ても感動する。もっともその時は、実のところ、「暫らくは遊覧飛行のつもりで、お楽しみください。」と言うアナウンスが放送されたものの、悪天候の場合にはアイスランドに引き返すこともある、との事前の知らせを受けていたので、このまま引き返すのだろうか、とか、もしかしてこんなところに不時着したら、どうなるのだろうか、などと、今となっては余計な、奇想天外な心配をし、緊張の連続であって、とても楽しむ余裕などほとんどなかったのだけれども。ほぼ予定時刻の10：50頃Narssarssuaqに到着した。時差を考慮すれば5時間近い飛行時間であった。氷山の浮かぶフィヨルドに接して作られた滑走路に、海上から陸に向かって無事着陸した。多くの人々が飛行機を降りた。澄んだ空気、ヒヤリと冷たい。とうとう未知の、そして不安と期待のグリーンランドに来ることが出来たのだ。はやる心で滑走路を徒歩で、飛行場の建物の方角へ向かった。時々振り返り、写真を撮ったり、周囲の景色を見たりしながら、歩いていた。すると西洋人ではない、明らかにイヌイットの御婦人が親しそうに声を掛けてきた。しかしその言葉がわからない。戸惑ったが、致し方ない。同じ東洋人種なので声を掛けたのであろうか。言葉がわからないのであれば私が外国人であることは明白である。それを悟ったと見えて、微笑みながら遠ざかって行った。建物の中に入り、飛行機を降りた人々のざわめきの中で荷物の回収を待っていると、青年に声を掛けられた。東洋人で、外国人は他にいないのですくに見分けがついたのであろう。旅行会社の、当地の係員であった。名前はL.R.といった。荷物の回収の間、当方の目的がノルマン人の遺跡を訪れることであると告げた。彼はデンマークのÅrhus（オルフス）大学の、

法律学を学ぶ学生であり、この時期にアルバイトに来ていたのであった。ホテルから一台のマイクロバスが迎えに来ていた。砂埃にまみれながら、乗り込んだ。座席のカバーは破れ、塗装のはげたボデーには赤茶色の錆がこびりついている。飛行機を降りた、先程の大勢の人々は、一斉にどこに消えたのか。そのざわめきは一陣のつむじ風であったのか。バラックのようなターミナルビルに残されたのは、深閑として、私達だけであった。ガタゴトと車に揺られ、ホテルに着いた。チェックインはもう済んでいるので、直接部屋へ行ってもよい、との事で、L.R.は荷物を持って、部屋まで運び入れてくれた。とりあえず簡単なホテルの案内を受け、朝食、夕食の食券を受けとった。改めて遺跡の様子を伺うなど、しばし会話のやり取りをした。そのなかで、L.R.は31日（火）のNarssaq（ナルサーク）へボートで行く予定は不可能である、と言う。何を言うのか。既にその予定は了解済みの筈であるし、どうしても行かなければならない遺跡があるのだ。その遺跡に関する論文、その遺跡の写真を見せ、どうしてもそこに行く、と主張した。それならば後で14：00時からイクスカーション全体の説明があるから、そこで再度言ってほしい、とのL.R.の弁であった。彼の役割りは飛行場からホテルまでの案内であり、それ以後の対応はS.T.の担当である、との事である。ホテルの2階のラウンジでイクスカーションのパーテイ全体の説明があるという。

時間になったのでパーテイ会場に向かった。Kulusukでのイクスカーションがそうであったように、異なる国籍の、多くの人々が集まって、がやがやしているものと思い2階に上がって行った。誰もいない。担当のS.T.がいた。彼もÅrhusの大学生で、中国語を学んでいるという。挨拶を交わした。私以外、誰もいないとは全く予想外であったので、奇妙な気分であった。「あとどのくらいの人が参加するのか。」との質問に、「参加者が加わるかもしれないが、今のところはあなただけだ。」という。「だから個人ガイドのようなものです。」という。さて、イクスカーション全体の説明を聞いた。当初31日（火）にNarssaqの遺跡、8月1日（水）にQagssiarssuk（カシアルスーク）の遺跡に訪れるという予定は相互に日程を替える、という。日程変更だけならば、問題はないとして了解した。懸念していたNarssaqへはボートで行く、と説明した。

予定通りになった、と理解した。そのような説明がほぼ終了しかけた頃、もう一人の担当者であるC.J.が２階に上がってきて、Narssaqへはボートでなく、ヘリコプターで行く、という。500クローネの割増料金は問題ではないが、約束ではボートで行くことになっていたし、ヘリコプターには乗ったこともなく、怖いので、それは困ると、言った。理由を聞いても、都合により，とのことで、それをS.T.に聞いても埒があかない、と思って、それ以上の追及は控えた。問題はヘリコプターに乗るか、どうかだ。「船よりも安全ですよ。」と、S.T.は笑って答えた。「言い換えれば、船は危ないのか。」などとの、私の質問も、やや冗談で、言ってみたところで現実味がない。現地では、ヘリコプターは、船と同様に、日常生活の足となっているのである。氷河巡りをヘリコプターでするツアーもあることは知っていたので、ヘリコプターも全く信頼できないわけではなさそうだ。船ではNarssaqまでおよそ2時間ほどかかるところ、ヘリコプターではおよそ20分程度で着いてしまい、時間の節約になる、とはS.T.の弁であった。意を決してその計画に同意した。8月2日（木）は予定通り、Igaliko（イガリク）の遺跡へ行くことを確認した。当初の、おもな計画はその3日間であった。それで「説明会」は終了するものと思っていると、「本日私達は15：00 ～ 17：00にNarssarssuaqを車で一周して、見学します。博物館にも行きます。また8月3日（金）07：00 ～ 10：30にはQooroq（コロック）湾に落ち込む氷河の先端の観察に行きます。」、と言う。「私達は――――行きます。」という表現に、違和感を覚えた。そのような計画はなかったはずだし、そのようなことを頼んだ覚えはないな、と思っていると、「もし希望ならば」、ということであった。要するに追加の提案なのである。彼らにとっては仕事の開拓、営業なのだろう。8月1日Narssaqへ行くのにボートではなく、ヘリコプターを使うのは、主催する旅行会社にとって団体料金1人分で１艘のボートをチャーターすることは、経営上問題になるからに他ならない。それよりも定期便たるヘルコプターを使わせ、料金は個人持ちとさせたほうがいいのは、もっともなことである。「進んだ」「文明」社会たる先進国の吐き出す「灰色」の汚濁からは遠く隔たったはずのここ「グリーン」ランドにも、天空には清冽な空気と暗くなるほどの紺碧なスクリーンが覆い、海上には、神秘にして、透けるような紺色を秘めた氷

山が、鏡のような水面に自身を映し、浮かび、漂うここNarssarssuaqにも、「文明」社会を突き動かす経済の原理が躍動していたのである。もう二度と来ることはないのだから、その提案に乗ることにした。

15：00にホテルの前に出向いた。シートカバーはあちこちで破れた、がたがたのマイクロバスで、まず港に行った。夏は大型の旅客クルーズの船が接岸するという。しかしその夏は、せいぜい7月、8月でしかなく、9月下旬からは気温も下がり、冬はその港は言うに及ばず、フィヨルドは氷に閉ざされるという。ここはノルマン人のErik（エリック）が入植したとされるEriks Fjord（エリックスフィヨルド）の最奥にあり、溶けた氷河によって、真水の割合が高いので、それだけ凍り易いのだという。港には、小さな船とボートが繋留されていた。次にHospital Valley（ホスピタル・ヴァレイ）に行った。あたりはやや広い平地となっていた。ここは第2次世界大戦及び朝鮮戦争における、米軍の負傷兵士のための病院（a relief hospital）であったという。病院は1941年に開始された飛行場の建設に伴い、テントによるベッドから始まり、1943年には250ベッドの病院が完成した。1942年には1821人、1943年には2137人の負傷兵を扱ったといわれる。とりわけ朝鮮戦争中には1000ベッドを擁する病院になった。谷に向かって左の斜面には、当時水を確保するためのダムの跡が残っていた。せいぜい20センチメートル程の低木と、紫色の国花たるヤナギラン（セイヨウキョウチクトウ）（rosebay; French willow）の花が、咲き乱れていた。その紫色が、透き通るように、美しかった。この谷をさらに上流に登って行けば、Flower Valley（フラワー・ヴァレイ）があり、そこにはその名に恥じない多種多様の花が咲き誇っているという。今立つこの地の下方に目をやれば、氷河の溶けた水によってできた湖があり、その水面は微風に同調して揺れ、午後の陽光を反射してキラキラと、まぶしく光っていた。建物は1966年までは残存していたといわれるが、今は病院の屋根に使ったのか、スレートの破片が散乱する荒野となっている。病院を語る唯一の遺物であるといって、S.T.が説明し、指摘したのが、暖炉（the fireplace chimney of the old officers' club：the old chimney of the nurses' dayroom）であった。底辺が1.5メートル前後、高さ4，5メートルの、石（レンガ）をコンクリートで固めたものであった。呑み込まれそうに

（暖炉）

青い天蓋を背景に控え、谷の両側の山は、荒々しく、急峻な景観を示すのではなく、むしろところどころに緑の草か苔がパッチワークのように貼りついており、親しみを感じた。ここに搬送された、傷ついた兵士は、真っ青な海に浮かぶ氷山を目撃し、緑のビロードの山を見やり、紫の花を凝視し、青い天蓋を仰ぎ見て、何を思ったであろうか。戦争の大義はともあれ、彼も国家の名（「命令」）によって、ここに搬送されたのである。ここで病が癒えて、故郷に帰った人もいるかもしれないが、そのほとんどは死亡あるいは行方不明とされたといわれる。ここで最後の呼吸を終え、その命を終了せんとする人は、その期に臨んでどの様な思いが心によぎったであろうか。彼の遺体は花咲く野辺でどのように葬られたのであろうか。戦争に至れば、事前の取り決め事はどうであれ、すべて現実が優先されるもの。有るべき儀式は軽視され、無視されがちなのではなかったか。次に飛行場の近くに車を停めた。そして改めて説明を受ける。これは米軍によって、1941年コード名 “Bluie West One”とされるアメリカの空軍基地として建設され、主に燃料補給基地として利用された。1945年までに6000人ほどの兵員が利用、駐留し、大戦中は10000機余りの飛行機が利用し、アメリカとヨーロッパを結ぶ戦略的に重要な役割を演じたのであった。しかし、1958年軍事基地は放棄された。しかし1959年1月のCape Farewell（ケープ・フェアウエル）沖でのHans Hedtoft（ハンス・ヒートフト）号の海難事故を契機として、同年12月デンマーク空軍が飛行場の利用を開始し、それ以後民生用に使用され、現在に至っている。南グリーンランドは、まさにこの飛行場によって、外部との、飛行機による通行が可能となったのである。従って、この飛行場の役割はきわめて高いといわざるを得ない。次に、飛行場脇の、博物館に案内された。ここには、この周辺に生息する動植物に関して説明がなされ、剥製なども展示されていた。また、当

然ながら、赤毛のエリク（Erik the Red）に関わる入植の歴史について、説明、展示されていた。これに関しては、明日行くQagssiarssukにある、かつてのBrattahlid（ブラッタリッド）の遺跡を見学することに越したことはなく、それが最良の方法であり、今回の最大の目的である。しかしなんといっても、現代に直接つながる歴史として、この地を考えるうえで決して軽視し、無視してはならない重要なテーマは、米軍が駐留していた事実であろう。駐留米軍に関わる当時の様々な品物、つまり通信、軍事、医療、事務、生活、気象などに関わる品々や写真が数多く展示、掲載されていた。予期していなかった、このような展示物に言い知れぬ、深く、重い感動を覚えた。そして同時に、ノルマン人が成し遂げた「輝かしい」植民の歴史の足跡を、ただそれだけを検証すべく、ここにやって来た自分に対して、言い知れぬ嫌悪感に打たれた。この飛行場が米軍によって建設された、という「知識」は、書物から知ってはいたが、それは抽象的な知識に過ぎなかったのだ。人が人を殺しあうという戦争、そういう冷厳な歴史的事実の存在、その自覚した認識を避けていたのだ。さらに自分について白状すれば、定住する住民の数が、およそ150、60人のこの地の、バラックのような薄暗い建物の一部をそれに充てる博物館にはあまり期待はしていなかったのだ。しかし今や博物館とは何かについて改めて自覚せざるをえなくなった。大都会の、白亜の殿堂たる建物にあって、しかも展示物は細かく分類、整理され、詳細な説明文が添えられ、明るく、天井の高い多くの部屋を擁する建物、そのようなものだけが博物館であるのではないのだ。博物館の意義、価値、重要性はその建物や陳列様式にあるのではなく、その展示物の内容であり、それが語る人間の歴史であろう。しかしそれにいかなる意義を、いかなる価値を見出すのか、それは見学する人、本人にあるのであり、その人の問題意識なのだ。一通り見学してから、入り口の左側にある、みやげ物売り場に案内され、入ってみた。しかし販売すべき品物自体、ほとんど無かった。胸中は暗く、重い足取りで博物館を後にした。道路を挟んで反対側には、小さな遊園地があり、いくつかの遊具が置かれていた。その左奥には、植村直己のレリーフが設置されていた。1978年彼はグリーンランドの北端から犬そりによる縦断を試み（5月12日から8月22日）、ここまで到達し、その偉業が達せられたのである。また、

Erikの息子のLeif Eriksson（レイフ・エリクソン）がVinland（ヴィンランド）に到着したことを記念する催しが2000年7月に行われて、その石碑が道路沿いに建っていた。ここからは私一人徒歩でホテルまで戻って、この日の見学会は終了した。まだ陽も高く、時間もあったので、飛行場の先端、海岸まで散歩した。海水は、氷山が浮かんでいるとはいえ、予想したほど冷たくはなかった。また海特有の臭いは全くしなかった。真水の割合が高いからなのだろうか。ホテルに戻った。他に見学すべき特別な施設は、何もないのだ。シャワーを浴びて、しばし休んだ。18：30から夕食が用意されるので、それを待ってレストランへ行った。娘さんが案内してくれた。お客さんは私だけであった。海の見える席であった。まだ陽も輝いているのに、ローソクに火を灯してくれた。このように明るいうちから、ゆったりと時間を過ごすというような機会がかつてあったかな、などと回想した。彼女は今晩の料理の説明をしてくれた。一番目の料理はロブスターで、二番目の料理はコロッケ。「飲み物は何になさいますか。」回答すべく、メニューを見ながら、ワインをあれこれ注文してみたが、これは無い、あれはまだ用意していない、など、結局は、月並みのハウスワインの白、ということになった。概して言えば、食べ物や飲み物にはあまりこだわらないのだ。さて、ロブスターは殻がついており、食べ方に少々苦労したが、淡白というか、さっぱりして、かつ上品な味であった。

**7月31日（火）**

本日は09:00～17:00 Qagssiarssuk/Brattahlid と Tasiussaq（タシュサーク）が予定である。出発の10分前にホテルのロビーに出向くことになっている。S.T.が案内役である。しかし、昨日の「説明会」で感じた疑問点をあらかじめ聞いておくために、08時に、ホテルのロビー右端にある、主催旅行会社の事務室に出向いた。まず伺ったのは、第一に8月1日（水）にNarssaqへ行くヘリコプターの超過料金、500クローネの根拠である。第二は、8月3日（金）07：00~10：30に予定しているQooroq湾の氷河見学の費用、450クローネの根拠である。さて、2人から成る「エクスカーション」として、本日の予定の行動が開始された。まず例のがたがたのマイクロバスで港まで行った。そこから対岸

（エリック入植地跡の景観）

のQagssiarssukへ行くのである。ボートに乗った。運転手は青年で、その弟も乗っていた。「これはスピードボート（高速船）だから、いつもより速いよ。」十分程で対岸に着いた。岸に降りるのではなく、岸に登るのである。つまり岩壁には鉄の梯子が垂直に嵌め込まれており、それをよじ登って、岸に上がるのである。生活必需品を商っているKni（クニ）による店があったので、そこで昼食の時に必要となる飲料水を買うことになった。実は現金は不必要と思って、持参してこなかったのだ。そこでクレジットカードを使って、飲料水の代金を払い、同時に若干の現金を換金した。高台に上がり、Qagssiarssuk全体を見渡した。当日は曇っており、しかも風も吹いていたので、寒く感じられた。わずかの小雨も時折落ちていたように思われた。そこにはErikの像が建てられていた。2000年の7月に行われた祭りの時除幕されたのである。これはTromsø（トロムセ）とSeattle（シアトル）にある像と同じものであるという。海に浮かぶ氷山は見ることができたが、背後の岩山の頂上は雲に包まれて見ることはできなかった。エリックの入植地跡の景観は、その写真を持参していったので、およその概観はあらかじめ承知していたものの、それを確認することができた。小さなÐjodhild（スヨッドヒルド）の教会跡（２×3.5メートル）にも立ってみた。この周辺には、1961年144人の男女、子供の遺骨が発掘されたのだ。この遺骨に関する興味ある調査結果は別紙に委ねざるをえないが、すべては東向きに埋葬されており、またその一体には左胸にナイフが刺さったままになっていたという。現実にその遺跡を目前にし、その現場に立ってみると、やっとその場に来たのだ、という感動が沸き起こる。氷山の浮かぶ、この海を前にして、頂上は今は雲に隠れたこの岩山の、この麓で、サガに書かれたあのドラマが展開したのだろうか。左胸のナイフにはどんなドラマが展開したのであろうか。近くにある1300年頃

の教会跡には、長方形をした、多くの礎石が残されていた。書物で見た、写真と同じだ。「本当にそうなのだ。ここなのだ。」1300年頃の教会跡から少し海の方角に下ったところで、復元されて建設されたÐjodhildの教会とErikのロングハウス（Longhouse）に入ってみた。これは2000年7月に開催された記念祭のとき除幕されたのである。Narssaqの観光協会の一員として、同じくÅrhus大学の女子大生であるKr.が私のために、この遺跡について案内をしてくれた。しかも復元された家の鍵を私に持たせ、その開け方を指導してくれた。その建物の周囲は芝土の壁で囲まれ、屋根も芝草に覆われていた。当時はここには多くの羊が遊んでいたのであろうか。1千年前ばかりではなく、今もそうなのだ。屋根には羊の糞が転がっていた。ロングハウスは、以前カナダのNewfoundland（ニューファンドランド）のL'Anse-aux-Meadows（ランド・オ・メドウ）で入ってみた、復元された建物に似ていた。ただし、ここでは当時の織り機も復元され、展示されていた。そればかりではなく、鍋も樽も置かれていた。家の中に泉を備え、飲料水の確保が図られていた。ノルマン人の住居が復元されていただけではなく、イヌイットの家屋も復元され、床にアザラシの毛皮が敷かれ、捕獲したアザラシを保存するための、石で囲まれた通路のような細長い部屋を見学することができた。一通り見学してから、Isafjord（アイサフォルド）のTasiussaq（タシュサーク）へ向けて山を登ることとした。片道8キロメートル。果たして歩き通せるか不安だ。途中会った羊は怖くはないが、野放しの、大きな馬には、少なからず恐怖を感じた。「ぜんぜん怖くない。

（Ðjodhild教会）

（Longhouse）

優しい動物ですよ。」、とS.T.は言う。でも、心持足取りを静かにして通り過ぎた。片道8キロメートルとはいえ、いろいろおしゃべりしているうちに、行程の中ほどに来た。標高400メートルのその峠では、一方の側にEriks Fjord、他方にIsafjordのTasiussaq湾を眺望でき、山岳的景色、湖、そしてすばらしい、パノラマのような景観が見られはずであった。ところがその時は周囲がガスに覆われ、わずかに湖の一部を見ることができただけであった。しかも風も吹き、寒くさえあった。休みを取るにもあまり条件が良くないのでもう少し先に進むことも考えたが、ほぼ12時だし、お腹も空いたので、無理をしないことにして、ここで昼食を摂ることにした。風を避けて、岩陰を見つけてお弁当を広げた。ホテルの用意してくれた弁当は大きくて、一人分を2人で食べても十分な量であった。さらにりんごとジュース。お腹は膨らんだ。出発してしばらく歩くとEriks Fjordよりも多くの氷山の浮かぶTasiussaq湾の縁に、くすんだ濃緑の屋根が点在している光景が眼下に見えてきた。曇天であったためか、村落の印象は淋しい。あれが目的の村だ。到着すると、一軒の家でコーヒーを飲み、休む、という。靴を脱いで部屋に案内された。コーヒーとルバーブで作ったという、甘い、ジャムのようなものが振舞われた。年配の御婦人と中学生ぐらいの娘さん、それに私達がソファーに座った。ご婦人の名前はJ.G.といった。いろいろな話しをした。こちらの目的がノルマン人の遺跡の調査であることに言及すると、当然ながら、Erik、Leif、そしてQagssiarssukのBrattahliđのことが話題になる。ここで面白い質問を受けた。サガによれば、LeifがVinlandに向けて出航するとき、Erikが馬に乗って港まで行くが、途中で落馬する、となっている。しかし、実際はErikの家と海岸までは近いのであるから、馬に乗る必要はなかったのではないか。なぜ馬に乗ったのか、という質問であった。なるほど、現地に生活する者にとって、その実感は当然であろう。そのほか、魚を手摑みで獲るという日常生活の話しもしていた。私も少年の頃、田舎で小さな川に堰を作り、水を止めて魚を手摑みで獲った経験があった。しかしそのような川はもはや田舎にはない。だがここにはそのような川があるのだ。羊に関する話しに移った。それがいかに難儀であるか。なんといっても秋にどれくらいの干草を確保出来るかが、どれだけの羊を越冬させることができるかの分かれ道である。越

冬させることのできない羊は、かわいそうだが殺すしかいのだ。仮に多く生かしておいても、全部を小屋に入れられないし、屋外でたたずむ羊は足が凍って動けなくなることさえあるのだ。だからやはり殺さなくてはならないのだという。確かにフィヨルドに接した、わずかな平地には緑の草が、予想以上に茂っていた。この点では「Greenland（グリーンランド）」というのも、あながち間違いではないであろう。しかしそのすぐ背後の、山の麓、斜面にはわずかな草や野生の植物が生えているに過ぎない。したがってあの程度の草で、羊も馬も生きていけるのか、ここまで山を登っている間少なからず疑問、不思議に思われていたのだ。だからその話しには納得できた。牧羊農家も忙しい。夏は牧草の収穫、秋は冬の準備、冬は越冬する羊や馬の世話、春には羊が出産する。そしてすぐ夏が始まるのだ。夏らしい夏はせいぜいほんの数ヶ月、6，7，8月ぐらいに過ぎないようである。接待をしてくれたJ.G. が婦人であったこともあって、話しは羊の毛の話しに移った。この国は原毛を輸出することが禁じられているので、それを製品にしなければならない。それでJ.G.は特に冬季には、Narssaqに滞在して織物の指導をしているという。羊の毛を使ったいくつかの作品を見せてくれた。布にして製品化したものや絵にしたものなど。原毛を染色し、紡ぎ、そして織り、そして製品にまで仕上げるそれぞれの工程の話題に熱が入った。紡ぎの難しさ、つまり毛の種類のみならず、一頭の羊でもその部位によって異なるのである。また染色の技術、色を出す草木の種類などなど。とりわけ面白かったのは、草木の種類をいかに相手に伝えるか、であった。日本語⇔英語⇔デンマーク語⇔グリーンランド語。さらに分からない植物の名前に話しが及ぶと、J.G.の娘さんが使っていたグリーンランド語・フランス語、グリーンランド語・ドイツ語の辞書を取り出してみるようなこともあった。ほかに、当然ながらアザラシ狩りの話しにも及び、その銛を実際に見せてくれた。話しは尽きない。J.G.はこの記念にジャコウウシの原毛をくれた。そしてその保存方法を説明してくれた。再確認のために質問をすると、「そうだ、そうだ」と微笑んでいた。またJ.G.は記念としてバッチを胸に挿んでくれた。紡ぎ機を図案化したもので、その周囲には、英語に訳せば、”Sheep Holders’ Women”とあった。時間には終わりがあるもの。そろそろ席を発たなければならない。

ノルマン人の遺跡はあちこちにあるのだが、その一つがすぐ近くにある、というので、同席していた娘さんに案内してもらった。地面に垂れ着く、だぶだぶのズボンを履き，手には携帯電話を持って。この娘さんは先の会話の中でも、臆することなく、給仕された例の甘いジャムを盛んに食べるなど、まだ子供らしさの残る、屈託のない振る舞いをしていた。その遺跡は食糧の貯蔵に利用していた建物らしい。帰路はJ.G.の運転する車（「タクシー」と表現していた）で帰ることにした。彼女は簡易宿泊所も経営している。エンジンと鉄板の覆いだけは付いている、それでもマニュアルのギアシフトは機能しているライトバンに乗り込んだ。その娘さん、犬も同乗して、Qagssiarssukの村に向けて出発した。山道はデコボコで、車は揺られ、天井に頭が衝突しないように、緊張して乗っていなければならなかった。しかも座席のカバーは破け、クッションも露出しているので、座るというよりは、実際は中腰で立って乗っているようなものであった。それでもその娘さんは車中でもなにやら携帯電話で話しをしていた。峠に差し掛かった頃、車は止まって遥か頭上を指差した。オジロワシだという。何羽が空高く旋回していた。その中で２羽は親子で、子供のワシに飛び方を教えているのだと説明された。これを見られたのは幸運なことであるという。オジロワシの剥製は昨日、博物館で見ていたので、実際の大きさは推測できた。Qagssiarssukの港に着くとChr.、L.R. そしてもう一人の娘さんに会った。彼女もÅrhusの大学生である、という。彼らも対岸のNarssarssuaqに帰るところなのだ。L.R.は明日デンマークに帰るので、今日は登山をしてきた、とのことである。今朝私達を送ってくれた、そのスピードボートが迎えに来てくれた。私たち、L.R.、そしてその娘さんが乗った。Århus大学はデンマークでも古い大学であり、その名は知っているというと、彼女は喜んでいた。おしゃべりしていると、あっという間にNarssarssuaqに着いた。例のマイクロバスでホテルに着いて、今日の予定は終わった。今日もよく歩き、疲れた。夕食は昨晩と同じ娘さんが給仕してくれた。えびの剥身、子羊の焼肉、コロッケ、それにパンであった。その味は、昨晩と同様、シンプルにして、上品であった。

**8月1日（水）**

（Narssaqへのヘリコプター）

ヘリコプターでNarssaqへ行く日である。09：10頃ホテルを出て、飛行場へ向かう。私一人多少不安はあるが、覚悟するしかない。ヘリコプターの左横腹にある席に座る。しっかりとベルトを締める。音がうるさいのでヘッドホンのような器具をつけるように指示される。ふわっと宙に浮く。思っていたよりも揺れない。これまでの飛行機と変わらない。不安もいつしか消えた。飛行時間は20分程度だというので、デジタルヴィデオカメラを回しっぱなしにする。海側なので、氷山が海上に浮いている様子が、眼下に見える。青く、透き通るような色はとても神秘的である。太陽光線が水面の小さな波に反射して、キラキラ揺らめく。ガスバーナーに火をつけた時に見る炎の色というか、コバルトブルーというか、そうした色で、しかも思わず引き込まれそうな、清冽で、神秘的な青色を内に込めた氷山が、水面にもそのまま映し出されている。海水も一様でなく、薄い黄緑色もあれば、白っぽいところ、紫色っぽいところもある。次々に現れ、二つとして同じでない氷山の形と色に見とれていたが、あっと気がつけばNarssaqの村が眼下に見えてきた。写真で見ていたその村であった。ついに着いた。あたりの写真をとりながら飛行場を出ると、青年が待っていた。J. K.である。インターネットからNarssaqの観光協会の担当者2人の顔写真をコピーしておいたので、すぐそれとわかった。自己紹介して、すぐに彼の車に乗った。当方がノルマン人の遺跡に行きたいことは既に伝わっていた。直ちに、村の中心から少し離れたところにある、Dyrnes（ディールネス）に案内してくれた。緩やかなU－字形をした谷の、陸に向かって左側の、底からは少し上がった所に、その遺跡はあった。そしてU－字谷の底には小川が流れていた。その谷の奥数キロ先には氷河があるという。遺跡から海の方角に目をやれば、大小さまざまな氷山が折り重なるように、漂っていた。遺跡の両側に

は岩山が滑らかな斜面を伴って、そそり立っていた。すばらしい、雄大な景観であった。かつてこの教会の立地条件が申し分のないことは、言うまでもない。遺跡の直下にある泉の水をJ.K.に勧められて、飲んだ。何の臭いも、抵抗も無く喉を通り、滑らかに飲み干した。おいしかった。その遺跡の少し上に登ったところには、食物の貯蔵に使ったと思われる遺跡が残っていた。通気を配慮した石組みが施されていた。黄色の花が一面に咲いていた。地面に咲く、苔のような小さな紫の花は鼻に近づけると香りを放ち、指先でつぶすと、なお一層の香りを放った。小さなベルの形をした紫の花を摘むと、白い汁が出て、わずかに甘かった。物音ひとつ聞こえなかった。ただ、鳥の鳴く声がしていた。川がカラコロと音を立て流れていた。J. K.は「この水はきれいだから飲めるよ」、といって飲んで見せてくれた。氷河が溶け、直接ここに辿り着いたのだから、人間界の汚染物質には侵されていないことだろう。頭上を見上げれば、呑み込まれそうな、紺碧の空に覆われていた。眼下に見る青い鏡には真っ白な氷山が静かに映し出されていた。これこそ地上の天国か。途中、遠くから見ると残雪に見える白い帯の正体に迫った。それは直径2センチメートルほどの植物の綿毛〔ワタスゲ（cotton-grass）〕であった。次の遺跡に向かう途中、J. K.の事務所である観光協会に立ち寄った。何か連絡事項でもあったのだろうか。あるいは何か購入してもらいたかったのであろうか。一応見回したが、当方としては特にそうしたいと思う品物は何もなかった。次の遺跡（“a Norse *landnáma* farm”）は、港のすぐ近くで、羊の屠殺場の脇にあった。1954年，1958年，1962年に行われた発掘の概要に載っていた写真の現場一帯は、金網で囲まれ、20～30センチメートルも成長した草によってぎっしりと覆われ、また咲き乱れる黄色い花が地面を隠していた。しかもここには、とりわけ蚊の大群が生息し、閉口した。蚊の生息については予め情報を得ていたので、洋服から露出する肌の部分には防虫軟膏を塗っておいたのであるが、洋服の上から攻撃されたのではたまらない。案内をするJ. K.は半ズボンで、何ヶ所も蚊に刺され、さかんに掻いていたが，気にもしていない様子であった。この遺跡からは、Qagssiarssukにノルマン人が入植する少し前の年代に、ノルマン人がここで生活していた可能性が指摘されている。念願であった、この遺跡に直接足を踏み

入れることができたのは幸運であった。次に、そこが済むと、決して頼んだ訳ではないが、羊毛製品の工場へ案内された。フェルト製の、主に靴を作っていた。フェルトによる帽子なども製造していた。特に珍しくはないが、何も買わないのではせっかく親切に案内してくれたJ. K.の好意を無にしてしまうことになるので、感謝のしるしとして3足買うことにした。帰りの荷物が嵩張らないように配慮しなければならないのだ。974クローネであった。ところが、その代金をカードで支払おうとしたところ、機械が働かない。そこでJ. K.の事務所で現金化し、それで払うこととして、事務所に取って返した。さて、その事務所で現金化しようとしても、ここでも働かない。何のことは無い、電話コードが差し込まれていないのだ。だが、彼はそもそもそれだけの現金が金庫にあるか、心配になり、確認して、なんとかその金額相当の現金があるとわかって、安心したようであった。その現金を持って先の工場へ行き、無事精算が済み、再びJ. K.の事務所に戻った。そろそろ12：00頃になる。ヘリコプターは13：15だから、それまでは自由時間だ。事務所で椅子を借りて屋外に出た。その建物の右横に連なる高い草地に椅子を据え、昼食とした。ホテルの用意してくれたサンドイッチは、またしても大きく、一人分を2人で食べても十分な量であった。食べていると脇の道を住民が通る。同じアジア人種なので親しみを感じたのか、声を掛ける人もあったが、グリーンランド語はわからない。明らかに酒気を帯びている者もいた。ただ「ハロー」と返答するしかない。食べ終わってから、さらに上に登ってみた。岩場の、平らな小さな広場には、数人の住民が集まり、酒を飲んで、互いに大声で会話をしていた。そう言えば前日S.T.が住民であるイヌイットは怠慢であるとして、不満と批判を吐露していたが、このような事情であったのかと合点がいった。しかし、あれが彼らの「仕事」なのだろう。仕事を与えられることはなく、ただ生かされているのだ。そうであってみれば、そうした彼らとて決して幸福ではないはずだ。その高台から望遠できる、済みきった海、山、川の景観とは対照的に、そこに住む人々にとって心は黒雲に覆われていることであろう。そんな思いに駆られながらぼんやり景色を見ていると、下方からJ. K.が大声で呼んだ。ヘリコプターの出発時間が早まったので、飛行場へ行こう、という。飛行場に着くと、係員は「あなたを待っていました」、

と言ってすぐヘリコプターに乗るように促した。J. K.にさようならを言って、急いだ。他の乗客は１人であった。だから全部で乗客は２人。でも私を急がせるのに、どうしてJ. K.の事務所に連絡してきたのだろうか。私の行動はJ. K.の事務所と一体であることがわかっているのである。それほど外部から訪れる人は少ないのだろう。確かに村は閑散としていた。ヘリコプターは飛び上がってから、どういう訳かしばらく一箇所に留まって、飛行しなかった。やはり左側に座ったので、今度は山側を主に見下ろした。真上から眼下を覗き込めば、煤煙に汚染されていない、地球創生の頃と全く変わることなく、ほとんど風化の進んでいないような溶岩の岩肌が一面に広がっていた。そっと手を触れれば皮膚が引き裂かれるような、ごつごつとして、デコボコの割け目には大小の緑色をした水溜りが点在していた。ただ眺めていては、余りにももったいない、何かをしなければ、何ができるか、と悶える。眼下の岩山、湖、海、氷山になぜ感動するのか。汚染された所から、遥か何十時間を費やしてやって来たので感動するのか。それならばこの地に生きる人々にとっては、感動しないのか。このような景観を示すのはほんの数ヶ月に過ぎず、冬季にはEriks Fjordの奥のほうでは一面氷に覆われる、そうした厳しい自然環境なのだ。そうした自然を美しいものとして、感動することが出来るのであろうか。取り留めのない妄想を追っている内にヘリコプターはNarssarssuaqに到着した。13時を過ぎた頃であった。本日生まれて初めてヘリコプターを体験したのは、驚異であったが、それにもましてNarssaqでノルマン人の遺跡を実際に踏査できたことは最大の収穫であった。ただし、非常に残念であったのは、完成品として復元してみれば、およそ直径9.5センチメートルの円盤であったと予想される、この遺跡から発掘された石製の半月形の遺物をこの地の博物館で直接みることができなかったことである。つまりNarssarssuaqへ帰るヘリコプタターの時刻と博物館の開館時刻が合わなかったのである。

ホテルに戻り、荷物を置いて、散歩することにした。30日に車で連れて行ってもらったHospital Valleyに行くことにした。今度はゆっくりと周囲を眺めながら行ける。透きとおる青空を背景に、所々に緑の布切れがパッチワークのように配された岩山が、両側に悠然と控えていた。その間を、上手奥に向かって

狭まりながらも平地が広がっていた。そこがHospital Valleyであり、かつて野戦病院のあったその場所である。その中を流れる小川があり、それが湖に連なっていた。湖に近づき、手をそっと入れてみた。思ったほど冷たくなかった。一昨日に車で案内された時は、湖に降り立つことはできなかったのである。今度は帰る車が待っているわけでないので、心の赴くままに、ここにいられる。自然の真っ只中。何の音もない、静かな、静かな所であり、時間であった。時々囀る鳥の鳴き声があったか。耳朶に流れる微かな風の音。それ以外に何も無い。地上に生える10センチメートルにも満たない植物に黄色の花が風にゆらゆら靡いていた。こんな自然の中でも、あの山、あの岩山のどこかの岩陰で、小さな、小さな動物が、日々営々と、ひっそりと、そして楚々と生きているに違いない。そしてそこには彼等なりの生存競争があり、生死があるにちがいない。しかしそれは人間にとっても同じこと。人々が争い、傷つけ合い、そして殺し合ったのだ。前述の暖炉の前に再び立った。崩れた暖炉には、小石や煉瓦のかけらと混じってこんもりとした灰が残っていた。一体この中には何が入っているのだろうか。傷つき、倒れた者の衣類は無いのであろうか。その衣類の中には家族の写真が入っていなかっであろうか。それとも遺品は燃やされなかったのであろうか。戦場で自身と孤独に戦う、唯一の支えになった、だからその人にとって命に等しい数々の品々が、ここで灰になったのであろうか。この地で逝った多くの兵士は、様々な理由によって「正義」の戦争に駆り立てられたのであろう。しかし私達が「人間」である限りいかなる大義であれ、「正義」の戦争などはあってはならない。なぜならば、私達人間は他の動物と区別され、「ホモ・サピエンス（homo sapiens）」と形容され、あるいは高等動物と言われている。その「高等」にして、「ホモ・サピエンス」が互いに殺し合うということは本質的に自己矛盾と言わなければならない。そうでなければ、何を以って「サピオ（sapio：分別がある；賢明である）」なのか。しかしこの数千年人間が実際に歩んできた歴史を振り返ってみると、人々の間に様々な理由により互いに対立が生まれたことはむしろやむを得ないとしても、それを解決する手立てとして互いに何らかの武器を以って威嚇し、あるいは相手を殺害する、という事態が繰り返されてきた。そのような方法以外に、何らの方法を学ばなかったので

あろうか。歴史書のページを捲るごとに、無数の命が奪われ、筆舌に尽しきれない悲劇が記されているというのに。しかし、そうような歴史が現にあったとしても、この地で死に逝く者は、何億、何十億、何百億年という壮大な宇宙の歴史の中で生成された物質、それを核として人類を創造させ、進化させた土隗の一握りに戻るということであり、もはや二度と、この壮大な宇宙のどこにおいても、現れることはできないのだ。生前どのような立場にあり、いかなる生き方をしたとしても、死して逝けば、一粒の土に戻るのである。だからここで人生の終了を迎えざるをえなかった人々は、その理由はともあれ、人類の歴史と言う大局に立って見れば、やはり人間による人間の戦争の犠牲者であったのだ。その意味で、「敵」、「味方」に区別はなく、死者はみな平等なのだ。ただそっと、そう呟いたとしても、透き通って青い大空を背景として立ち尽くす暖炉の残骸は虚しい。午後とはいえ、まだ高い陽光が、微風に揺らめく湖面に、眼底に眩しく、キラキラと瞬いていた。静かな、雄大なこの景観の中にも、そんな歴史があったのだ。過ぎし日々ノルマンの人々も本当はそんな歴史を逃れ、人が人と争い、傷つけあう、そのようなことの原因となる事態を避けるべく、ここにやって来たのではなかったのか。しかし人は所詮この地球からは逃れられないのだ。仮に他の惑星に移住したとしても、そのような人間による人間の歴史を克服しない限り、真の解決にはならない。また繰り返されるだけだ。他の動物には無い人間の知恵は他の動物では味わうことのできない素晴らしい歴史を生んだのだが、皮肉にもその知恵によってもたらされた、その悲しい歴史を克服しなければならない宿命を負うことになったのだ。しかしそれは可能なのであろうか。議論の大前提は、人の命の尊厳は無条件に尊重されなければならない、ということであろう。それを侵すいかなる理由も、弁解も無用である。しかしややもすれば人の命が軽んじられ、人の命が金銭の多寡によって左右されかねないという現実。さらに遺伝子操作の技術が開発され、人為的な人間の複製が既に技術的に可能であるという現実。人は神にも、悪魔にもなれる、といわれる。人はその魔性を克服することは出来るのであろうか。Narssarssuaqのこの地にとって、米軍によって建設された飛行機の滑走路の存在がきわめて重要であることは前述した。その現実的事実は疑いえない。しかしその建設が

その魔性によって成し遂げられた象徴であるとしたら、それは悲しいことだ。静かにたたずむ湖と風に揺れる草花を後にして、帰路についた。爽やかな風が吹いていた。しかし足取りは必ずしも軽かったわけではない。途中、道路を挟んで飛行場の反対側にある、観光案内所（インフォメーション）に立ち寄った。応対してくれたその人の名前はS.L.といった。彼は人なつこそうに、一つの問いかけにも、その何倍もの応答をしてくれた。彼には私が日本人であることがわかっているのか、植村直己をよく知っており、彼のグリーンランド横断に際しては、彼の父と共に、いろいろと忠告をしてあげた、と言った。自分はイヌイットの伝統を大切なものと思っているが、それを蔑み、軽視する人も少なくない中で、植村はそれをよく尊重してくれた、といっていた。その植村がそうした偉業を成し遂げたことは、彼にとっても誇りなのだ。植村のレリーフをあたかも自分のことのように自慢していた。私は、植村は間違いなく彼の胸の中に生涯生き続けるであろう、とその時思った。植村の遺した事跡は決してグリーンランド横断だけではなかったと思う。短い会話であったが、人の心情には人種や国境の相違のないことを、そして残念ながら、ここでもイヌイットとデンマーク人の間に存在する感情的違和感を読み取らざるをえなかった。ホテルに戻った。Hospital Valleyは意外と遠かった。30日は車で連れて行ってもらったので近く感じられたのだ。今日も疲れた。シャワーを浴びてからレストランで夕食を摂った。今晩は牛肉のステーキ、蒸かしたジャガイモ。パンは付いていなかった。食べきれない程の量であった。朝晩はとても涼しい、というよりは寒いのでビールを飲む気にはなれないが、今日は少しは飲んでもいい気分になったので、ホテルのキャフテリアに行って、小ビンを買い、部屋で飲んだ。明日に備え早々に就寝した。

**8月2日（木）**

今日の予定は09:00 ～ 17:00 Igaliko（イガリク）の訪問である。今日もS.T.が案内役である。例のホテルのバスで港に着いた。今朝は朝から雲が低く垂れ込んでいた。観光協会の人々５～６人が、忙しそうにカヤックを船に積み込んでいた。その中には昨日会話したS.L.もいた。商業用の写真を撮るために行くの

だという。氷山の漂う海で仕事をするだけあってのことか、中型の武骨な船であった。船はEriks Fjordを南下し、沖に出た。海上は冷たく、風もけっこう強かった。やがて船は大小様々の氷山に取り囲まれ、その氷山の間には霧がぎっしりと詰まっており、周囲は無限の奥深さに包まれていた。濃霧に包まれ、乱立する氷山の山中にあって、唯一人私が座っているかのような幻想に囚われた。今や蟻のごとく小さく感じられるその船は、その氷山の間を縫うように、エンジン音を発て，淡々と進んでいった。私以外は、寒さのためか、物珍しさも無いためか、船倉に入ってしまった。私は手袋をはめ、頭にはフードを掛けて、寒さにじっと耐え、足を震わせながら、この神秘的情景のすばらしさを見逃すまいと、船首にじっと座って、周囲に目を凝らした。そうしているうちに、濃霧の中で自分１人が海上に留まって居り、その自分に対して、形も大きさも様々な氷山の怪物が、ぐうーと両脇から押し迫り、そしてすーと流れ去って行くような錯覚に囚われた。毛布が配られたので幾分足の震えは収まった。S.L.が船倉から出てきた。そしてイヌイットのカヤックの特殊性、その大切さ、そしてイヌイット文化の重要性を熱っぽく語った。またこの海上の周辺一帯に生息するアザラシについて説明してくれた。その捕獲の仕方、難しさを、身振りを交えて話してくれた。そしてイヌイットこそその技術を持っていることを誇りとしていた。コーヒーが給仕されたので、一杯飲んだ。寒い体にはおいしかった。船のすぐ脇を流れるように迫り寄る氷山には、大小様々あり、しかも無数の造形を示し、２つとして同じ形はない。太陽が出ていないにもかかわらず、青白く輝く氷山もあった。神秘的で、吸い込まれそうだ。１時間ほどでItelleq（イテリク）に着く。S.L.はじめ、他のメンバーともさようならを言って、私たちだけが船を降りる。ここでも垂直の岩壁に嵌め込まれた鉄の梯子を上る。この頃には低く立ち込んでいた霧も上がり、辺りの視界も開け、岩山の頂上も見えてきた。清冽な空気が辺り一面を包んでいた。岩山の頂上から下方に傾斜して広がる、緑と赤紫色の斜面には、ひときわ目立つ、黄色の壁をした建物が一棟見えた。降り立った岸から少し離れた地点で、海面から数メートルの高さの位置に残る石組を指摘された。それはノルマン人が入植した当時、住民が作った貯蔵庫だという。今は誰もいない、淋しいこの足元にも、人は住んでいたのだ。

足元の岸から出発して、左手前方、斜めに緩い上り坂で、白い砂利道が続き、岩山の頂上で消えていた。あそこが峠で、その向こうにIgalikoの村があるのだろう。船上ではめていた手袋を脱ぎ、歩き出す。私たち以外、誰一人としていない。優しく、寄せては返す波の音、鳥のさえずりだけが音のすべてである。岸辺を歩く、ザク、ザクという足音を確かめながら歩き出す。すぐ砂利道に入り、登り坂に入る。歩きにくい。しばらく歩くと、左手下方に開けた土地と湖が見え、その一帯は緑一色になっていた。その中ほどには建物があった。羊の牧場なのだ。この部分だけを見れば、確かに「グリーンランド」だ。道中では、S.T.と、ホテルのコーヒー、食事、本国デンマークの食生活のこと、趣味のこと、学生生活のこと、互いに体験した外国での印象、など、など、取り留めない話しをした。そうこうする内に峠に着く。一方には先ほど出発した岸と氷山の浮かぶフィヨルドが、他方には氷河を頂く壮大、雄大な岩山（Illerfissalik, 1752m）が見え、その手前、眼下にはIgalikoの村落を眺望できる。すばらしい景観であった。左手少し高い岩山の頂上に数メートル四方の、平らな板張りがあった。あれは展望台、と思いきや、実はヘリポートであった。案内書に拠れば、ここは南グリーンランドで最も美しいところの一つであるという。異存はない。Igalikoの村落をみおろしながら、村全体の、建物、遺跡の説明を受けた。あれがKni、あれがユースホステル、教会で、あれが待望の遺跡。箱庭を見ているようだ。この村の人口は、夏はおよそ40人で、冬は20人程になるという。イヌイットは、ここに集合して生活をするという習慣には必ずしも馴染めないのだと，S.T.は説明した。村に向かった。牧草地に入ってはいけないとの注意を受けた。当然だ。生命線たる、大切な牧草なのだから、と理解した。「でも住民は自由に入っているし、それは許されているのだよ。」と、S.T.は薄笑いして、付け加えた。まず

（Igaliko <Gardar>の教会遺跡）

Kniへいってみた。食料品、衣類など、生活雑貨があまりきちんと区分されることなく雑然と並んでいた。アメリカの、デズニィーのアニメーションのヴィデオも目にとまったが、埃を被っていた。次に、今回の最大の目的である、教会の遺跡に向かった。1125年頃Lund（ルンド）で叙任された司教の任地場所たる遺跡である。当時はGardar（ガルダール）と呼ばれ、ここに司教座がおかれた。遺跡は広く、ここには大小さまざまな石が散在し、今も一部の、大きな石組が存在していた。ここには聖堂、司教舘、納屋、家畜小屋などもあったのだ。しかもこの遺跡の背後の、山の斜面には、水を一時的に貯めておくためのダム、また水を導くための灌漑施設もあった。持参した配置図や写真と異ならなかった。この遺跡を元にして当時の建物を復元した、カラーの図案を見せていただいた。まだ見ていなかった図案なので、たいへん参考になった。当時かなり大きな規模の建物群であったことが想像される。時間は十分にあったので、遺跡を歩き回った。背丈の大きな草に埋もれているのもある。一つの石に腰掛けた。静かであった。遺跡の下方前方には、青いEjnars Fjord（エイナルフィヨルド）が右手から入り込んでおり、その対岸には、海からせり上がる、頂上に氷河の流れる裸の岩山Illerfissalikがあった。白い氷河は、むしろ暗く見えるような青い空を背景として、なお一層白かった。雄大な眺めであった。東京を含めた大都会で車から放出される排気ガスとは、およそ無縁な、清冽な空気の真っ只中にいた。想像されるこのような建物群を拠点として、当時の人々はここで、どんな生活を営んでいたのであろうか。この山、海を見て何を思ったであろうか。次々と、取り留めのない思いが浮かんだが、回答を真剣に求めたのでもなかった。近くにある教会へ入った。質素な教会であった。そろそろ12時になるので、キャフテリアへ行った。用意されていたサンドイッチを食べた。これまで海外の町で味わった、気にかかるような味ではなく、ここでも、淡白にして、上品な味であった。コーヒーと紅茶を入れたポットが置かれていた。そのポットは、決して新品ではなく、日常に使用されているように思われた。一瞬見慣れた商標が目に入った。象の印であった。「日本製」を確認した。ここでこのような製品を見るとは、予想もしていなかった。食後フィヨルドまで一人気ままに散策した。狭い浜辺では、独り言を呟いているような寄せる波

が、帰る波と遊戯をしているかのようであった。手を浸してみた。海水は冷たくなかった。村の平地では1台の車が牧草を収穫していた。時間が充分にあるのでそこで作業する自動車を眺めた。まず牧草を刈る。次に刈られた草を吸い上げて、ロール状にし、一定の大きさになると、鳥が卵を産むように、それをポトッと下に置いていた。他に作業する車はなかった。他に見るべきものは何もなかった。狭く、所々に草の生えている空き地では子供たちが、ボール蹴りをしていた。しかし子供たちは、炎天下で、汗を振り払いながら快活にボールを追いかけ、我を忘れて走り回るというような光景ではなく、何故か淋しいボール蹴りであった。今やここを去る時刻となった。ゆっくりと帰路に就くことにした。村を出発するに当たり、トイレを借りるために昼食を食べたキャフテリアに立ち寄った。その家の前に一台の自動車が停まっていた。当然ながら、山野や小石だらけの道を走る車であるから、その姿態の状態は推して知るべし。ただここで奇異に思ったのは、車のナンバーがないことだ。これはたまたまそうなのだと思ったが、念のためS.T.に聞いてみた。彼に拠れば、ここには警察官はいないし、車を登録して、税金を払う人などいないのであり、むしろそれが当たり前なのだ、という。確かに道路の整備も自前だと考えられるし、そもそも道路標識など意味がない。運転を誤って起こす自損事故はあるかもしれないが、他人を傷つける自動車事故はありえない。いろんなことを考え、感じたことを反芻しながら帰り道を登っていると峠に着いた。その村を振り返り、見た。今朝この峠で初めてその村を目撃した時の感情と同じではなかった。知りたくなかった現実の断片を見てしまったからなのだろうか。確かに、案内書が記述するように、ここが南グリーンランドで最も美しいところの一つであることに疑いはない。しかしここで日々働き、生きる人々にとって、そのことは一体何なのだろうか。帰り道もS.T.といろいろなことを話した。そんな話しの中で、村からかなり離れたところに建っている家のことが気になったので聞いてみた。家には所有権はあるが、土地にはない。申請して認められれば、どこでも家は建てられる。ここでは1割の費用を自分で持てば、4割は自治体が費用を持ち、残りの5割はデンマーク本国が出すのだという（Home Rule System）。S.T.はその制度になんとなく不満そうであった。帰り道は往路と違って、今朝

上陸した岸辺にすぐに着いたような気がした。迎えのボートを待った。コチャ、コチャという、岸に寄せる波音、岸の岩場から滴り落ちる水音、草や這うように低い木々を飛び回る鳥の声。透きとおって見える海底の水草、その上をゆったりと漂う、離れ来たった小さな氷山。すべてが静かであった。清冽であった。しかし胸中すべてが平和であったわけではなかった。迎えのボートが来た。今朝の船ではなく、7月31日にQagssiarssukへ運んでくれたスピードボートであった。運転手はその時の青年で、弟も乗船していた。S.T.によれば、彼はアザラシ狩りの名人で、帰路の海域でアザラシを発見できれば、できるだけ近づいてみてくれる、という。鉄の梯子を下りて、乗船した。氷山が浮かび、漂う海上を滑るようにボートは走った。乗客は私たちだけである。しかも今やよそ行きの配慮は無用な、知人同士の気分だ。少々僭越かもしれないが、友人同士で繰り出すドライブのような気分だ。走りながら、運転手、その弟、S.T.は海上のあちこちに目を配る。「いた。あそこだ。」ボートはその方向に向かう。エンジンを切る。次にアザラシが浮上するのを待つ。しかしどこに再び浮上するかはわからない。「いた。あっちだ。」「あれはリングアザラシ。」「あっちはグリーンランドアザラシ。」後者は大型であるという。説明はしてくれるが、実のところその違いをはっきりと認識することはできなかった。しかし、とにかく、浮かんでは消え、また浮上するアザラシ。あたりを見回すように窺う、ひょうきんな仕草をしているツルツルした頭、その数頭を目撃したことは確かだ。しかもボートの中にあって、身体は吃水線より低く、目線は海水面より少し高いくらいなので、迫力がある。「あなたは幸運だよ。こんなところでアザラシを見られるなんて。」と、私よりもS.T.のほうが興奮気味だ。言い換えれば、私は、正直のところ、アザラシの発見に我を忘れて、有頂天になることはできなかった。今日Igarikoにおいて、どうしても行ってみたかったノルマン人の遺跡は見ることができた。そのことがすばらしかったことは疑うことはできない。しかし、よそ者の感傷かもしれないが、その村の事情が気懸かりになり、心になんとなく引っ掛かるものがあったのも事実だ。しかし、私よりもボートの運転手、その弟、それにS.T.が真剣にアザラシ探しに没頭し、それを発見して喜び、興奮している様子を見て、もっと素直にそのことを喜ぶべきだと思った。ボー

トのエンジンが切られ、氷山の浮かぶ海上にゆったりと漂い、静謐の中に、アザラシ見物ができたことは二度と経験することのない、有り難い、幸運なことであったのだ。しばらくアザラシ探しと見物に時を過ごした。ボートはエンジンを始動し、スピードを上げて、港に戻った。心を込めて、貴重な体験をさせてくれた3人の誠意に感謝する。

ホテルにはおよそ17：00頃着いた。疲れた。暫らく休んでから、レストランに行った。配膳係りはいつもの娘さんではなかった。夕食の説明もなかった。どんな飲物にするかを尋ねることもなく、水を持ってきた。そこで無難な、白のハウスワインを注文した。確かに彼女は「ホワイト」と、反芻した。しかし持ってきたのは「赤」のワインボトルであり、確かめることもせず、いきなりグラースに注いだ。制止してもしょうがない、と理解した。彼女には英語がうまく通じないのだろうか。最初の料理は鮭の煮物と蟹の肉が入っているようなコロッケであった。ところが次の料理がなかなかこない。30分以上は優に経過していた。もう帰ろうか、とも思った。やっと先の配膳係りの御婦人が来て、「料理人は2人で、忙しいのです。すみません。」との説明のようであった。確かに今晩は、いつになくお客さんが多いい。これまでは、気の毒に思うほど、少なかったのだ。お客さんが多いいことはいいことだ、もう少し待とう、と気を取り直した。待ちに待った、次の料理は、果物の入ったクレープで、少々甘く、おいしくなかったわけではないが、多少手抜きをしたと思われた。これがこのホテルの､最後の晩餐であった。食事を終えてレストランを出たところで、昨晩まで給仕をしてくれた娘さんが、若者達とダートをして遊んでいた。「今晩もあなたならよかったのに。」というと､「今晩は休みなの。」と言って、ダートを続けていた。若者らしい、すがすがしい返答であった。こちらの事情など知る由もない。それでいいのだ。部屋に戻った。今晩はおおよその荷造りをしておかなければならない。明日は07：00~10：30 Qooroq湾で、氷河の先端とそこから落下して浮遊する氷山を見届けに行くのだ。Eriks Fjordの最奥では、これが流氷を産み出す最大の源泉なのだ。しかもここから帰るとすぐに飛行場へ行き、出発しなければならない。

**8月3日（金）**

すぐホテルを発てるように、すべての荷造りをした。支払いを済ませるべく、06：00に受付に行った。数分で済むだろうとの予想に反して、結局30分ほど待たされた。つまり最初に応対した男性（警備員らしかった）は、あれこれしているが、結局分からないとみえ、いつも受付に陣取っている中年の女性が、別の棟から出てきた。それで時間を取ったのだ。出発の準備が整う。ホテルの、いつものガタガタの小型のバスに乗り込み、港に着く。今日も案内役はS.T.である。参加者は私だけ。実は、このたびのエクスカーションの予定表は、7月30日以来ホテルの案内板と主催旅行会社の案内板に貼ってあった。ほかの参加者を募っていたと考えられる。結局誰も他に参加しなかったのだ。朝から快晴だ。今朝はついている。昨日は朝のうちは霧が深く立ち込めており、午後から晴れ渡った。どうもこのような気象の変化のあり方が一般的なように思われた。だから昨日は、前述のように、Itelleqに向かう海上では、Eriks Fjordの両脇の岩山は全く見えなかったのに、今朝は岩山も海も氷山もはっきりと、しかも朝日を浴びて輝いて見える。すばらしい眺めだ。キリット空気は冷たいが、とても気持ちがよい。船は昨日往路を航行したその船であった。つまりスピードボートよりも一回り大きく、頑丈な船であった。氷河の先端に迫るのだから当然だろう。乗客は2人。だから船には船長とその助手、合計４人だけ。採算は合わないだろうに。船は差し当たりItelleqに向って南下する。しばらく進んでQooroq湾の入り口に差し掛かると、一見２、３階の家を思わせるような氷山が前方一面に、重なり合って、立ちはだかっている。乱立する氷山の山に向かって船は突入する。大丈夫なのか心配するが、近づくと氷山は互いに隙間もなく重なっているのではない。氷山に衝突するのではないか、というこちらの妄想にお構いなく、船は氷山と氷山の間を縫って、氷山の脇、谷を通過する。氷山は見上げるように高い。だから、自分が船に乗っているという意識は消えうせ、一瞬宙に浮いているような気分に襲われ、目前に両脇から氷山が圧倒的に迫り、流れ去って行く。またその色も、透きとおるような青白い色をしているのもあれば、白い泡のような色もあり、また向こう側が見えるのではないかと思われるように透明なのもある。S.T.は氷の色と氷の出来方の関係を説明してくれた。

塩分を多く含む氷、降った雪が圧縮されて氷になった場合、氷が一度解けて再び氷になった場合、それぞれの氷によってその色は異なるという。氷河が海へ落ち込む付近、Qooroq湾の一番奥を目指して船は進む。一見すると峡湾は氷山によって一面に封じ込まれ、とても進めないのではないかと見えるものの、近づくと、それなりに氷山と氷山の間は空いている。船はそこを縫う様に進む。船員の一人は縄梯子に登って周囲、前方を見守る。バリバリ、と氷を割り、ゴツン、ゴツンと氷山が船底に当たる。不気味な音だ。こんなところで氷山に閉じ込められたらどうなるのだろうか、などと不安がよぎる。心配してもしょうがない。　氷河が海に落ち込むところからおよそ1.6キロメートルの手前、両脇の岩山に挟まれて幅600メートルほどの海域のところまで来て、船は止まり、エンジンを止めた。何の音もない。リンと張り詰めた空気。ブルッとするほど寒い。浮遊する小さな氷山、板状の氷が、船に静かに当たって、ゴツン、ゴツン、ジブジブー、ゴツン、ゴツン、ジブジブーと音をたてていた。峡湾は一面氷に覆われている。２キロメートル以上離れているにもかかわらず、あたかも目前に迫り、出来たての生コンクリートを流したような、巨大な氷の河が横たわり、その先端が絶壁となっている。それが落ち込む海上付近には靄のためか、かすんでいた。峡湾の両側の岩山は、朝日を受けて輝いていた。このような景観を目撃できたのは、何よりも早朝から快晴であったからであろう。「こんなに近くまでこられたのは、そう多くありません。」とのことであった。そうだろう。誠に幸運であった。船長さんも、船員さんも、もちろんS.T.もとても喜んでいた。誠意を込めて、案内しても、もし気象条件が良くなければ、その努力も報われないのだから、彼ら自身も喜ぶのも当然である。彼らの誠意と天候、その両方に感謝せずにはおれない。船員が網を海中に投げ込み、なにやら探していた。魚でも獲るつもりなのか、と思った。巻かれた綱が入れてあった樽に氷を採取し始めた。今度は氷から水質調査でもするのか、と思った。でもそのいずれでもなかった。この氷でオンザロックを作るのだ。小さなプラスチックのコップに氷を入れ、ワインを入れる。「注意して。プチュ、プチュと音がしますよ。そして氷から泡が湧き出ますが、その中に入っている空気は何百年、何千年前のかもしれないよ。」とS.T.は微笑した。船長を除く３人で乾杯をした。

身も心も厳粛で、リンと身の引き締まる乾杯であった。実はその数分前、胸が苦しくなる兆候を感じた。急いでそっと薬を飲んでいた。だからその乾杯には幾分不安はあったが、とてもそのワインを断ることは出来なかった。お替りのワインを勧められたが、さすがに一杯だけにした。それから数分間、周囲の景観を楽しんでから、船はエンジンを始動し、帰路に着いた。今度は往路とは異なる氷山の間を縫って、ひたすら進んだ。そしてNarssarssuaqに向かって、Qooroq湾を右側の海路を取った。これはNarssarssuaqへの近道なのである。今朝往路で見た大きな氷山の群れはQooroq湾入り口の左側で、幾分離れた海上に乱立していた。つまり、今朝船はわざわざ遠回りして、大きな氷山を見せてくれたのだ。私は船の先端に座り、船の舳先が掻き分ける氷と水しぶきをじっと見つめ続けた。今は見慣れたのか、もはや往路のように氷山の大きさ、形、色に驚き、我を忘れて見とれるということでもなくなっていた。船の舳先が分ける氷と水を見ながら、当てもなく、夢想に浸った。人生とはこの舳先のように漂う氷山を避け、時には突き当たり、水を掻き分け、水しぶきを身に受けながら、進行するものなのだろうか。何十年、何百年、何千年前に、このグリーンランドのどこかの天空で水蒸気が雪になり、地上に落下し、それが何十年、何百年、何千年の間に積もりに積もり、そして何十年、何百年、何千年を経て氷河になり、そして何十年、何百年、何千年を費やして流れ下り、海に落下し、そして今ここに浮き、漂っているのだ。今ここに見る光景は、壮大な自然の営みに連なっているのである。さて、人類が宇宙の様々な条件と偶然の中から発生したとするならば、人もやはり壮大な自然の一部だ。そうであるとするならば、眼前に見る雄大で、神秘的で、すばらしい、この美しい光景ともまた人間は一体である。ところで人類は自身を守り、生活をより豊かにするために活用されるはずの知恵をもったものの、皮肉にも自身およびそれを包む自然の存続を自身の手で抹殺しかねない状況に立ち至ってしまったのであろうか。何百種にもなる花が咲き乱れるというFlower Valleyの、その足下に存在したHospital Valleyの病院は、この美しい光景と一体であるはずの人間を自己否定している象徴ではなかろうか。982年頃Erikがアイスランドからここへ移住した頃は、所与の自然条件を享受し、自然と共に生きることが日々の信条であったのでは

なかろうか。しかし、忘れてならないのは、彼らがこの地を去った理由である。それが単に一説に言うように、気候条件の悪化だけでなかったとするならば、それは既に原住民イヌイットと移住者であるノルウェー人との経済的、社会的軋轢の存在があったであろうことを無視できない。Vinlandに入植したノルマン人のサガは両者が殺し合いという凄惨な事態のあったことを記している。つまり当時この地にあって日々生きる人々の間には既に、彼ら相互のうちに自己否定に繋がる矛盾を抱えていたのではなかろうか。ノルマン人の歴史を検証するためにここに来たのだけれども、眼前の、汚されていない自然を前にしてみれば、ノルマン人の歴史も野戦病院の歴史も、同一のレベルの課題でなければならない。夢想は限りない。

10：20頃港に着いた。途中ホテルによって、預けてあった荷物を回収し、空港に向かった。GL 786 12:50発København行きに乗るべくチェックインした。S.T.とはここで別れた。寝袋を背負い、大きな荷物を背負ったキャンパー、スーツケースを携行した人、小さな荷物を下げた住民らしき人、珍しく多くの人でごった返していた。ホテルで見かけ、ホテルの仕事をしていた人も空港の仕事をしていた。飛行機は遅れに遅れ13：45の表示が出た。風が強かったのでなんとなく不安であった。チェックインカウンターに人塊りができ、なにやらやり取りしていたが、それが何であるかは知る由もない。アナウンスが流れていたが、期せずして、その中に私の名前を耳にした。一瞬、不安、緊張がよぎった。もしかして、飛行機は飛ばないのではないか。事務室に入り、名前を告げた。待っていたように「あなたはKøbenhavnへ行くのだろう。天候の事情によりすべての乗客は運べない。」と告げられた。「それは困る。Københavnからは本国へ帰る飛行機に乗ることになっているので、どうしても本日中にKøbenhavnに着いていなければならないのです。そのためのチケットもありますが、必要ならお見せします。」「その必要はない。それでは努力はしてみます。」「この結果については後で知らせて頂きたい。」と念を押して、事務室を出た。このような事態の起こりうることは注意書きで何度も読み、知っていたものの、早速現実のものになるとは思ってもみなかった。数年前、前述のように、アイスランドからKulusukへ飛んだとき、悪天候のために着陸できず、し

ばらく上空を旋回し、天候の回復を待ったのであった。さて、しばらく待った。København行きの荷物検査（セキュリティーチェック）が始まった。チェックインカウンターへいって尋ねた。「私はKøbenhavnへ行けるのか。荷物検査を受けてもいいのか。」「あなたはKøbenhavnへ行けるから、すぐ荷物検査（セキュリティーチェック）を受けてください。」とのことであった。すぐ手続きを受けた。その関門を抜け、出発の部屋へ入った。「ああ、これで帰れる。」飛行機は予定としていたグリーンランドエアーではなく、クロスエアーであった。しかもKøbenhavnへ直行するのではなく、給油するためにアイスランドへ飛び、それからKøbenhavnへ行くという。これでKøbenhavnの到着時間22：10を大きく遅れることは間違いない。しかしとにかく帰れることで、良しとしなければならない。さて、結果はともあれ、どうして私が事務室に呼ばれ、飛行機に乗れない可能性を打診されたのか、今もって理由はわからない。

アイスランド空港では20分の給油休憩を取る。一時的に飛行機を降り、ターミナル内を歩き、見物した。開店している店は少なく、この飛行機の乗客以外はいなかったようで、閑散としていた。特にする事もない。レイフ・エリクソンのレリーフがあったので、写真をとった。アイスランドを飛び立ってからおよそ1時間ほど経過した頃、胸が苦しくなった。薬を飲んだが、なかなか収まらない。気休めに胸を軽くたたいていた。すると右後方の座席に座っている男性が声を掛けてきた。「震えているのか。」「そうではなく、どうも胸の具合が悪いので、こうしている。いつものことで、安静にしていれば、やがてよくなるでしょう。御心配してくれて、どうもありがとう。」と返答した。しかしなかなか胸の、押し付けられるような苦しみは収まらなかった。こんなときは、ますます悪い状況がやって来るのではないかと、無限に夢想しがちである。少しでも早く飛行機がKøbenhavnに着くことを祈った。飛行機はKøbenhavnに23:30過ぎに到着した。とりあえずほっとした。しかし胸は依然として苦しかった。荷物の受け取りを待っている間も、収まらなかった。荷物を受け取り、急いで鉄道駅へ向かった。切符売り場は閉まっているのか、それらしき窓口はなかった。ホームへ降りて、「切符はどこで買うのでしょうか。」と、電車を待っているお嬢さんに尋ねた。「私も良く分かんないのだけど、電車の中で買える

んじゃないの。でも多分ただよ（free）。No Problem!」と言って、ニヤッとしていた。本当は私も心の底から、ニヤッと笑ってその娘さんに応答したかったが、胸が苦しく、そんな余裕はなかった。電車に乗り、しばらくたった頃には胸の苦しみは収まっていた。結局、娘さんの予想通り、切符を買う機会もなく、駅に着いてしまった。ホテルは駅の近くだったので助かった。ホテルの部屋で落ち着けたのは、結局午前1時をとうに過ぎてしまった。就寝しょうとしていると、忘れかけていた胸がまた苦しくなってきた。また薬を飲んだ。それから1時間ほどうとうとしていたか、また胸が苦しくなり、目覚めた。また薬を飲んだ。それから早朝5時頃目覚めたが、また胸が苦しくなった。こうもしょっちゅう胸が苦しくなると、無限の不安は募る。再度薬を飲んだ。眠くなった。十数分うとうとしたか。胸の苦しみは収まった。

**8月4日（土）**

ホテルで朝食を摂るとすぐに、国立博物館へ行った。目的はグリーンランドのUunartoq（ウナルトック）湾の教会遺跡で発掘された木製の遺物である。博物館の受付で、持参した遺物の写真を示して、その遺物が展示されてある場所を尋ねた。「多分この辺でしょう。」と言って、幾つかの、可能性ある部屋の番号を教えてくれた。順番通りに見て回ったが見当たらない。そこで部屋を見廻りをする係りの御婦人に伺った。持参していた遺物の写真を見せると、この人はすぐに分かったらしく、これまでに見て回ったのとは異なる、別の部屋へ案内してくれた。果たせるかな、期待してその部屋へ行ってみると、その遺物の展示箇所には紙札が掲げられていた。つまり、特別展のために搬出されていたのだ。実に残念であった。「もし可能であるならば、実物を見に行きたいので、その特別展の開催場所を教えてくだい。」との私の問いに、受付係りの御婦人は、「アメリカよ。」「あなたはどこから来たの。」「日本。」「それじゃ、簡単でないわね。」かくしてその遺物はこの目で見ることは出来なかった。予めその遺物を見られるかどうか、当該博物館に問い合わせなかったのは、私の落ち度であった。実は、この遺物が木製の羅針盤ではないかと考える見解は少数意見であり、したがってこれが特別展に出展されるようなことは予想もしなかったのであ

る。しかしこれが特別展に出展されるということは、そうした見解が学界に認められつつあることの徴なのか。それはそれで大変興味のあることだ。もっとも、予め開催場所が分かっていても、アメリカでは所詮、完全に無理な願いであったのだ。諦めるしかない。こんなこともあるさ。ゆっくりと市役所の方へ向かった。市役所前の広場では多くの市が出店され、バンドが音楽を賑やかに演奏し、所々に多くの人の塊が出来ていた。しかしあまり興味はない。私は足繁く往来する人々に混り、ホテルに戻った。預けていた荷物を受け取り、鉄道駅へ行った。切符を買って、飛行場行きの列車に乗った。今度は係員が切符を確かめに来た。たった15クローネだが。SK 983は15：40ほぼ定刻に離陸した。

**8月5日（日）**

09：30無事成田に着いた。これで今回のグリーンランドにおけるノルマン人の遺跡の踏査は終わった。